

田辺遺跡

—国分小学校屋内運動場に伴う—

1989年度

1990年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は大和川と石川が合流する大阪平野の南東部に位置し、市域のおよそ3分の2が山地や丘陵で占められています。都心からわずか20kmの距離にしては、山や川などの自然環境に恵まれ、府下でも有数の緑の豊かな町であります。

ここ柏原市では人々が生活を始めたその足跡は、旧石器時代からみられ稻作が伝來した弥生時代にはすでに人々は定住しており、豊かな風土に恵まれた当市は河内文化発祥の地でもあり、奈良の玄関口として栄えたのであります。

本市文化財行政も今日のように変化の激しい時代に対応し、遺跡調査によって文化財の保存及び遺跡の公有化を図ってまいりました。

その保存、保護の一環として高井田横穴群一帯を、3ヶ年計画で史跡高井田横穴公園として平成元年度より実施する事になり、文化財保護の理念を一步全うできたと信じているものであります。

また本年度も市内各所の遺跡発掘調査を実施し、数多くの成果を得て本書発掘調査報告書を作成したものであり、今後地域文化の礎石として役立つものと確信し、より一層文化財保護にご援助、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月

柏原市教育委員会

教育長 庵刀和秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が平成元年度に実施した国分小学校屋内運動場の建設事業に伴う事前の緊急発掘調査概要である。

2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係 北野 重を担当者として平成元年5月1日から同年6月9日まで実施した。

3. 発掘調査及び本書作製にあたって下記の方に御指導、御助言を賜りました。

帝塚山短期大学講師 山本 昭 たらら研究会会員 大澤正己 飛鳥資料館
杉山 洋 千葉県文化財調査協会 穴澤義功 また、大澤正己氏には鉄滓の分析をしていただきました。

4. 調査協力は、次の方々です。

松井隆彦	竹下 賢	空山 茂	山田寛顯	桑野一幸
安村俊史	寺川 敦	津田美智子	寺尾正美	吉居豊子
小西千賀恵	山川正裕	菊川秀樹	尾野知永子	岡田久美
谷口鉄治	井上岩次郎	朝田行雄	麻 栄三郎	川端長三郎
西岡武重	山田貞一	堀 一之	鈴木 勝	田戸岩…
吉村啓治	奥野 清	乃一敏恵	横関勢津子	

5. 本書の執筆は、北野が主に行い、尾野が遺物の一部を担当した。

6. 本書で使用した標高と方位は、特に注記しないかぎりT.P.と磁北である。

7. 本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共にカラースライドを作製した。広く利用されることを願うものである。

目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調 査.....	5
第1節 遺構の概略.....	5
第2節 遺 物.....	10
第4章 まとめ.....	26

挿 図 目 次

図-1 周辺の遺跡.....	2
図-2 字名図.....	4
図-3 遺構概略図.....	6
図-4 土層断面図.....	7
図-5 大溝 2	9
図-6 棚列-1	9
図-7 須恵器 その1	11
図-8 須恵器 その2	12
図-9 須恵器 その3	13
図-10 須恵器 その4	13
図-11 土師器 その1	15
図-12 土師器 その2	16
図-13 増輪.....	17
図-14 井戸 2	18
図-15 瓦 (井戸-2出土)	19
図-16 磁羽口 その1	20
図-17 磁羽口 その2	21
図-18 鉄滓の分析と分類.....	23
図-19 磁着度別重量と個数.....	24

図-20	砥石	25
図-21	鍛冶関係遺物出土地	27
図-22	時期別鍛冶関係遺物出土地	28

図 版 目 次

図版 1	大溝 1、2 検出状況		
図版 2	大溝 2		
図版 3	大溝 2		
図版 4	大溝 2		
図版 5	調査風景		
図版 6	大溝 2	大溝 2 断面	大溝 2 断面
図版 7	大溝 2		
図版 8	遺物出土状況		
図版 9	井戸 1、2	井戸 1	井戸 2
図版10	大溝 1	大溝 1	大溝 1 断面
図版11	調査地区	調査前風景	調査後風景
図版12	出土遺物 その 1		
図版13	出土遺物 その 2		
図版14	出土遺物 その 3	輪羽口	鉄滓

第1章 調査に至る経過

柏原市は、市立国分小学校（国分本町6丁目）の屋内運動場の建替えを計画した。当地区は、田辺遺跡の範囲内に入り、周辺部から多くの遺構と遺物が出土している場所であるが、東西方向に延びる谷筋に大部分がかかるので遺跡の有無が未知であった。

平成元年4月1日、柏原市（担当教育委員会庶務課）が、文化財保護法第98条の3の通知書を提出した。柏原市教育委員会は、このような状況で事業者と事前の協議を実施し、事前の試掘調査を行うこととした。平成元年4月11日、調査区の中に2ヶ所のトレンチを設け重機を使用して調査を実施した。調査結果は、第1トレンチは、現在建っている体育館の北側に1×2mの規模で設定した。約190cmの深さで地山を確認した。新しい時代の盛土と自然に埋没した谷筋の堆積が見られた。遺物は出土しなかった。第2トレンチは、校庭内に1×2mの大きさで設定した。盛土と旧表土が約60cmあり、その下層から50cmの遺物包含層を検出した。遺物は、土師器と鉄滓が出土した。時期は、古墳時代後期から奈良時代までと考えられた。

これらの知見から、遺構と遺物が検出される場所は事前の発掘調査が必要であるとの結論を出し、調査の実施に伴う協議を持った。事業者は、学校の施設であり、完成予定期を設定しているので早急に着手するように依頼を受け、試掘終了後直ぐ着手する手続きをした。当調査区は、小学校の敷地内であり、校舎や施設の一部を取り壊す必要があるためこれらの作業と並行して2期に分けて調査を実施するようになった。

調査の実施は、調査範囲と排土するスペースを取りその周りに安全用フェンスで囲い、重機により盛土と旧表土を除去し、遺物包含層と遺構の掘削を人力により行った。

調査の結果、谷筋にあたる新しい時期の大溝と古墳時代後期の大溝と奈良時代のピット群を検出した。古墳時代の大溝は、鍛冶に関係した遺物が非常に多く出土したので、先生の依頼もあり高学年の生徒を対象に社会勉強の一環として現地の説明と遺物の展示等を実施した。当小学校の歴史を知るいい機会を持つことが出来た。

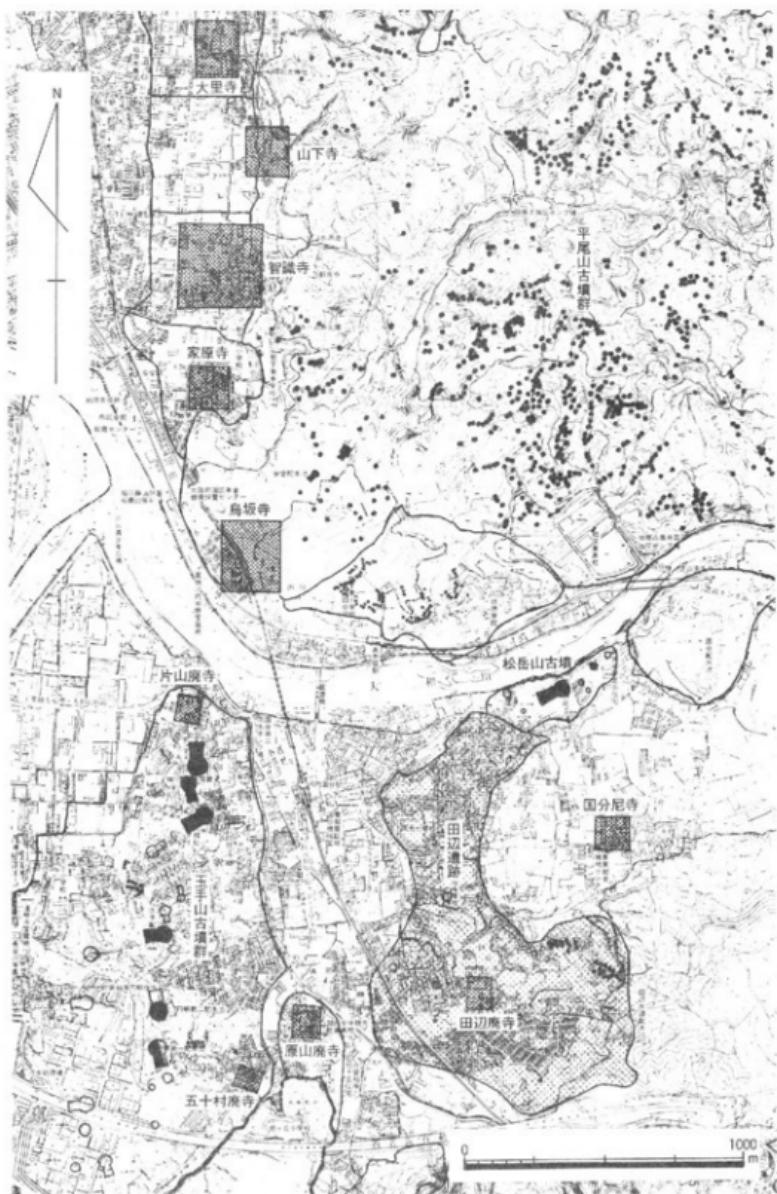


図-1 周辺の遺跡

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

柏原市は、大阪の東南部に位置し、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63km、面積24.77km²を測る小都市である。行政区画の隣接する市町は、北側に八尾市、西側に藤井寺市、南側に羽曳野市があり、奈良県境の北東方向に生駒郡三郷町、東側に北葛城郡王寺町、南東側に香芝町が接している。

大和川は、奈良県南部地域の非常に多くの小河川が合流して王寺町から亀の瀬を通過して生駒山地の南端部を西向きに蛇行しながら河内平野に流れ出る。また、石川は、金剛、葛城山脈の小河川から流れ出る水を集めて西麓部を北走し、原川も二上山山系から流れ出て市域の中心部で大和川に合流する。田辺遺跡は、この大和川の直ぐ南側、原川の東側の平坦な丘陵部に位置し、北側を生駒山地、南側を明神山系、西側を玉手山丘陵が自然の要塞のように取り囲んでいる場所である。

第2節 歴史的環境

生駒山地の西麓部や羽曳野丘陵、玉手山丘陵の平坦地に古代の集落が多く存在し、旧石器時代から近世までの時期の遺構と遺物が密集して出土している。

旧石器時代の遺跡は、サヌカイト石器の主産地である二上山周辺には、国府遺跡、はざみ山遺跡、船橋遺跡、玉手山遺跡の他、国府型ナイフが出土した安堂遺跡、有舌尖頭器が出土した大県南遺跡等の遺跡が密集して存在している。田辺遺跡は、田辺古墳群が在る丘陵の先端付近から有舌尖頭器や剣片が出土している。今後、集落遺構が検出される可能性が高いと言える。

縄文時代の遺跡は、大県遺跡の扇状地状台地に大集落遺跡が早期から継続して営われている。田辺遺跡は、石器等の石器が出土しているが土器が出土していない。調査例の増加で今後検出されてくると考えられる。田辺遺跡の西側原川の対岸に玉手山遺跡があり、さらに右川の西側に国府遺跡、船橋遺跡、本郷遺跡等の著名な遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡は、明神山山地の北麓部にあり、田辺廃寺の周辺が中心部と考えられている。遺構と遺物は、まだ顯著でなく今後の検証が必要である。

古墳時代は、弥生時代に引き続き集落遺跡が継続して営われ、当地区周辺部から堅穴住居、建物、溝、土坑等の遺構が検出されている。特に鍛冶関係遺物は、大県郡、安宿郡に属する集落遺跡から多数出土し、古市古墳群内の中期の古墳に鉄素材と考えられる鉄鋤を埋納した古墳がありその関連性を知るための重要な遺物である。また、生駒山地の南端部に在る金山彦、金山媛神社の後背山地から鍛冶関係遺物が出土しており、古墳の被葬者や神社を祭る氏族と当地

域の技術者集団集落がどのように結び付きがあるかが今後の課題である。古墳群は、前期の古墳群として、遺跡の北側に松岳山古墳群があり、西側に玉手山古墳群があり、古市古墳群の大形前方後円墳に先立つ古墳群である。田辺古墳群は、6世紀後半から始まり円墳と方墳が19基検出されている。被葬者は、田辺庵寺を建立した田辺氏の氏墓と考えられている。

奈良時代は、遺跡の南側丘陵上に田辺庵寺があり、周辺部に多数の寺院が建立される。大和川の北側には河内六寺が存在し、南側にも片山庵寺、五十村庵寺、原山庵寺、さらに国分尼寺、国分寺、東条尾平庵寺がある。古代の交通（竪田道や大津道）の要所であり、遺跡の文化や産業が最も栄えた時期であろう。田辺庵寺の伽藍配置は、薬師寺式で東西両塔、金堂、講堂、中門、南大門を具えている。昭和11年、大阪府教育委員会によって発掘調査が実施され、昭和12年に国の史跡に指定を受けている。この寺院周辺部で同時期の住居群が多数検出されている。

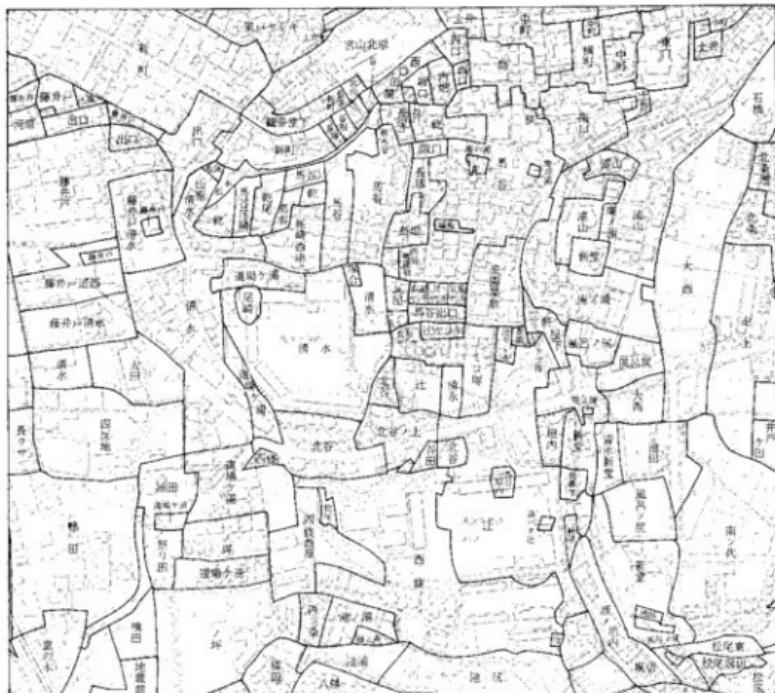


図-2 字名図

第3章 調査

第1節 遺構の概略

調査は、平成元年5月1日から同年6月20日まで実施した。調査対象面積は、約1000m²である。現状は、花壇と下足屋、体育館等の小学校の諸施設が平坦に造成された敷地の北西隅部に造られている。北側部分は、丘陵の谷筋部で東から西に下る斜面地となり道路のある場所が一番低くなっている。東側部分は、斜面を削り取って隣接地との境が約1m程低く段差がついている。よって、運動場の部分の旧地形は、南東方向から北西方向に伸びる尾根を削平して平坦にしたものである。

調査の実施に先立って、小学校内であり安全管理の面からフェンス囲いを設営した後表土を重機により除去し、遺物包含層と遺構の確認を入力によって掘り下げた。

調査の実施は、東西方向15m、南北方向10mの長方形の調査区を設定し5mの区画のグリッドを組み、遺物の取り上げ及び遺構検出の基礎とした。グリッドは、調査区の北西部から東方向へ1～3区、南西部から東方向へ4～6区として、後から5、6区の南側に7、8区を新たに設定した。割付軸は、磁北の方向に合わせた。調査の結果、4時期の遺物と3時期の遺構面を確認した。時期は、古墳時代中期、後期と奈良時代、近世である。第1遺構面は、近世の井戸、大溝、ため池、耕作地、排水溝等である。第2遺構面は、柱穴を主にした奈良時代のピット群である。第3遺構面は、鍛冶関連の遺物を多量に廃棄した古墳時代後期の大溝を検出した。

当調査区の基本土層は、第I層は、全面に20～30cmの厚さで花壇の耕作土と学校の整地層であった。第II層は、黄茶灰色粘質土で近世の耕作地である。北側では最大60cmと厚く学校の造成時の削平があまり成されていない、段々畑状になっていたと考えられるが、南側では大きく削平されており耕作が行われたか明らかでなく次第に薄くなり7、8区ではほとんど確認されなかった。出土遺物は、時期を明確に出来るものではなく、瓦と磁器の小破片が少量見られただけである。この土層除去後大溝1、井戸1、2を検出した。第III層は、大溝の埋土である。第IV層は、古墳時代の遺物包含層である。この土層から、須恵器、土師器の日常什器を含み、鉄滓、フイゴ羽口、砥石等の鍛冶関連遺物が多数出土した。

大溝1

南側肩部が南東方向から北西方向に伸び2、3、6区の第II層から検出した近世の大溝である。検出幅は、5m以上で深さ1.5mを測る。溝の向きは、上層でN-60°～Wであるが下層でやや北向きとなりN-45°～W方向である。埋土は、15層が、黄灰色砂質土で南側から北側へ次第に厚くなっている最大60cmを測る。第19、20層は、黄褐色粘質土、灰青色砂質土で第15層の中

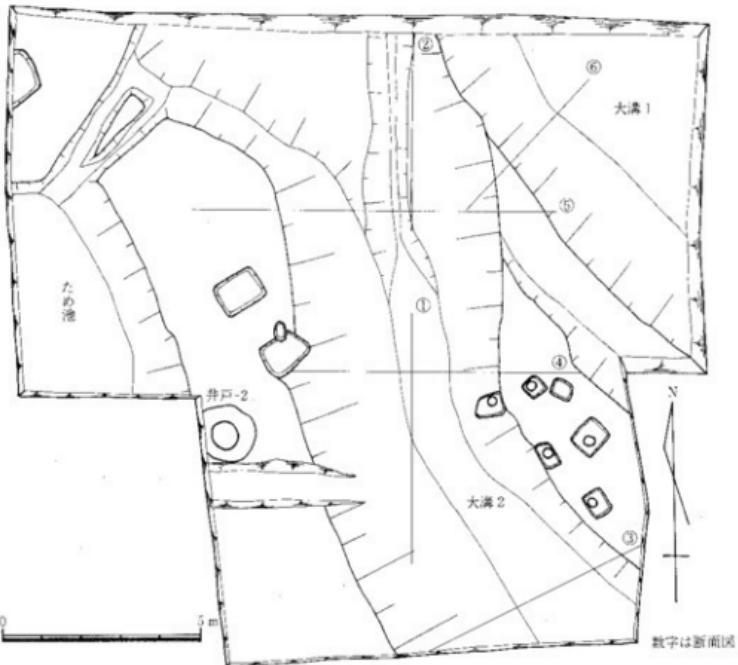


図-3 遺構概略図

に含まれた土層である。それぞれ50cm、20cmの厚さを測る。第21層は、薄茶褐色粘質土で15層の下層から厚さ80cmで北側へ向けて堆積している。第22層は、5cm大の黄褐色土をブロック状に多く含む薄茶灰褐色粘質土である。第21層と同様に北側の溝底部に落ち込んでいる。南側では、地山の黄褐色粘質土に接している。第23層は、薄茶褐色粘質土で5cm大の石を多く含んでいる。遺物は、近世の磁器類が少量出土した。厚さは、約40cmを測る。第24層は、青灰色粘質土である。この土層は無遺物層で約80cm以上の厚さで北側へなお下向している。この大溝は、調査後建物の基礎掘削時に立会したが幅15~20mの大溝であることを確認した。21~23層は、大溝が埋没した後に再度掘削した溝の堆積土となった可能性がある。この溝の性格は、近郊の水田の排水用溝であろうが、近世の状況が明らかでなく遺構自体も一部分の検出であるので今後の課題としておきたい。

井戸1

1区の第1層を除去した後に検出した近世の素堀の井戸である。大溝1の南側肩部から少し

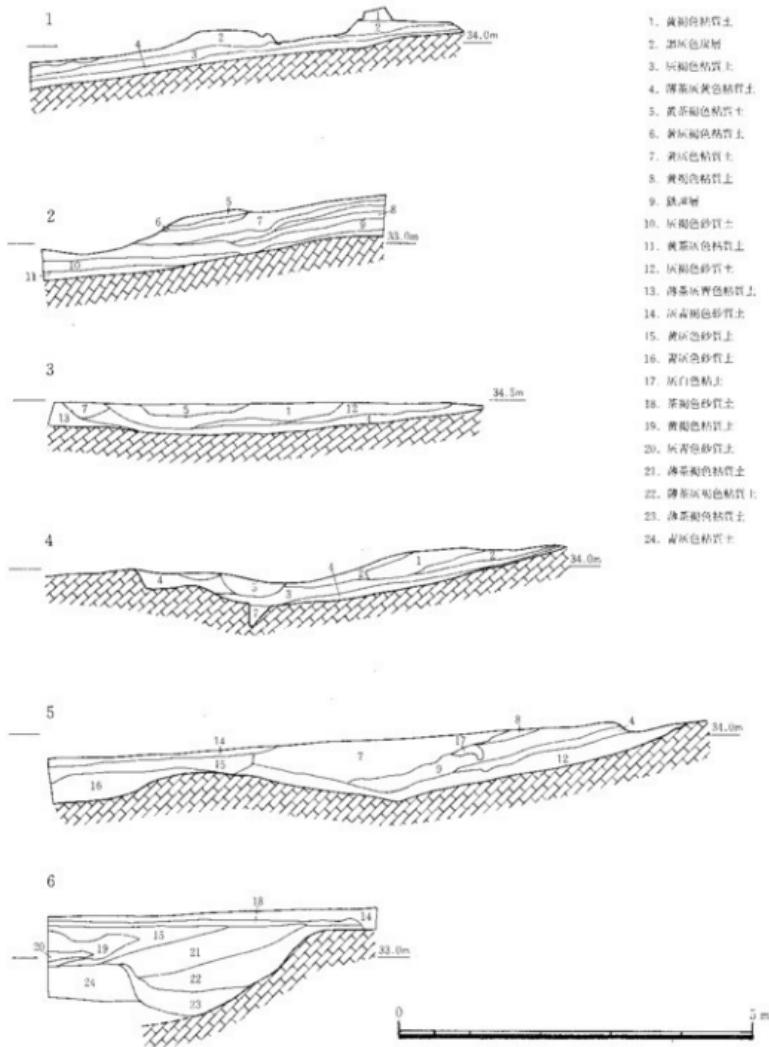


图-4 土层断面图

谷部に入った場所に在り、径1.5m、深さ約70cmの円形を呈する。埋土は、上層から1層、暗灰褐色粘質土で25cmの厚さを測る。2層は、黄灰色粘質土で厚さ20cmである。3層は、青灰色粘質土。10~15cm。4層は、5~15cmの黄灰色粘質土である。5層は、最下層で厚さ10cmを測る灰色砂質土である。遺物は、5層から磁器類と鍛冶関係遺物が少量出土した。

井戸2

7区から検出した円形の井戸である。形態は、上層が瓦積み下層を木枠で仕上げている。掘方規模は、135~145cmの隅丸方形で、下層に成るに従い狭くなっている。深さは、検出面から2.2mである。瓦は、検出面から約60cmの深さから4段が確認された。1周に9ヶの瓦を巡らせ各段の瓦が互い違いになるよう積んでいる。瓦の下側は、幅約20cm位の板材を円形に立てている。高さは、65cmである。底部から25cmの所で板材をくりぬいて土管が入れられている。当調査区の西側にため池がありその池から導水しているようである。反面保水性も良かったものと考えられる。井戸周囲の土質は、ほとんどが粘土または粘質土であるからほとんど湧水がない。

ため池

4区全体から検出した近世のため池である。東側肩部から西へ続いており、北側端部から排水溝を取り付けている。取口が1つであるがすぐ2股に分けられて大溝の方へ流れ出るようにしている。

大溝2

調査区の中央部に検出した谷筋状の大溝である。方向は、北半部分が南北方向で調査区の中央で東側へ屈曲する。検出規模は、長さ15m以上、幅5~6m、深さ0.5~0.7mを測る。溝の底部は、南側の標高が高く、34.1m、北側が32.5mと低くその比高差は1.6mを測る。溝の掘方断面は、緩やかな傾斜の弓状に落ち込む形状を成し、南側で徐々に浅く幅も広くなる傾向があり、中央底部で小溝が出来ている。埋土は、各区によって異なるが南西方向の斜面上方から落ち込んだ状況がよくわかる。断面図1は、大溝2の中心部を縦方向に観察した断面である。1層は、黄褐色粘質土である。当地域での地山と同質である。2層は、黒灰色炭層で約20cmの厚さを確認した。この周辺に鉄滓層が少なく炭層が特に多く見られた。炉がすぐ近くにあったものと考えられる。3層は、灰褐色粘質土で土師器と須恵器等の遺物が出土した。4層は、薄茶灰黄色粘質土で埴輪片のみ少量見られた。断面図2は、大溝2の北側中央部の縦方向の断面である。5、6層は、近世の上層である。7層は、黄灰色粘質土で若干の鍛冶関係遺物が混入している。8層は、黄褐色粘質土で1層と対応するものであろう。9層は、厚さ20cmを測る鉄

津を非常に多く含んだ上層で炭層に維続する。溝の西側肩部から落ち込んだ状態である。10層は、灰褐色砂質土で4層と同じである。11層は、黄茶灰色粘質土で無遺物層である。断面図3は、大溝2の南側横方向の断面である。12層は、灰褐色砂質土で、中に鉄分を多く含んだ砂粒が肉眼で見られた。13層は、地山かも知れない。断面図4は、大溝2の中程横方向の断面である。上層の炭層は溝の西側から廃棄したような堆積をしている。また、炭層が途切れる辺りから鉄滓の層に変化するようになる。断面図5は、大溝2の北側横方向の断面である。14～16は、大溝1の埋土である。鍛冶関連の遺物包含層は、西側上方から流れ出た状況がよく知れる層位である。断面図6は、大溝1の横方向の断面である。溝の底部を北側で確認していないが2m以上の深さである。

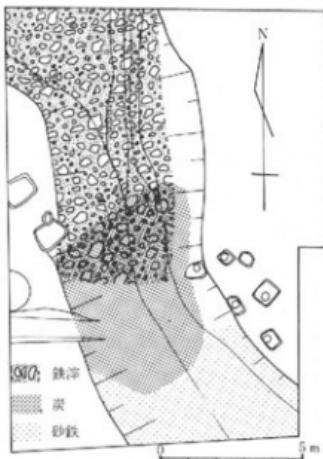


図-5 大溝2

ピット群

大溝の両側からピット群を検出した。溝の西側肩部に3ヶの土坑状ピットを検出した。一辺0.9～1.2mの隅丸長方形を成し、深さは、10～20cmで深くない柱穴痕を確認しなかった。ピット1と2の間隔は、2.5mを測る。時期は、遺物があまり出土していないので明確でないが鍛冶遺構と並行する可能性がある。溝の東側肩部から6ヶのピットを検出した。範囲が狭小のため性格が限定出来ないが建物あるいは柵列に成る柱穴であろう。ピット4～6は、ほぼ直線状に伸び、径約20から65cmの隅丸方形の掘方で柱穴痕が見られた。柱穴間は、2.0と1.9mである。方向は、磁北に対して東側へ40°振っている。時期は、奈良時代と考えられる。

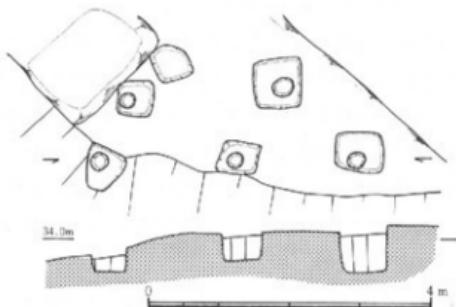


図-6 柵列-1

第2節 遺物

出土した遺物は、大溝2の埋土を中心としてコンテナ57箱分である。土器類は、須恵器、土師器が5箱と鉄滓、フイゴ羽口、磁石等鍛冶関係遺物49箱、瓦2箱、獸骨1箱である。遺物の説明は、各項目の遺物別に順次述べていきたい。

須恵器

須恵器は、杯、高杯、壺、瓶がある。この内、杯の蓋、身が大部分を占める。

杯蓋（1～9）は、口径が10.2～14.1cmで12cm位のものが約半分を占め、器高2.9～4.2cmの小型に属するものである。口縁部と天井部との境の稜がほとんどなく天井部がやや丸味を持っているものが多く扁平な感じのものが少ない。天井部の調整は、ヘラ切り未調整であるものが3点あるのみで他のものはすべて回転ヘラ削りを行っている。口縁端部は、尖り気味ながら丸く終わる。全体に丁寧な作りのものが多い。天井部にヘラ記号を持つものが6点ある。すべて直線によるもので「一」が4点、「二」1点、「三」1点である。

高杯の蓋が1点（14）出土した。口径13.7cm、器高4.5cmを測る。口縁部と天井部との境には稜がなく、やや丸い天井部の中程に扁平な中心部が凹部のつまみが付く。口縁端部は丸く天井部の3分の2は回転ヘラ削りで他の部分は回転なしで調整である。

杯身（20～45）は、たちあがりが有るものと無いものがある。前者は、口径8.8～13.1cmで器高2.4～4.0cmを測る。たちあがりは短く内傾し端部が丸い。たちあがりは、折り込み手法によっており張り付けは見あたらない。底部は、やや扁平な感じのものが多く安定性がよい。底部は、ほとんど回転ヘラ削りを行うが4点だけヘラ削り未調整である。後者は、口径10.1～11.3cm、器高3.4から5.2cmである。杯蓋を逆転したような形態で口縁部が長く外上方に真直ぐ伸び端部が丸い。底部は、回転ヘラ削りを行っている。底部にヘラ記号があるものが5点あった。「一」4点「×」1点である。

高杯は、有蓋のものと無蓋のものがある。前者は、たちあがりを持つ杯身と同様の形態に長脚を付けたものである。47と48は、接合出来ないが同一形態の組合わさったものであろう。透かし孔は、2段2方の長方形である。後者は、たちあがりが無い杯身を杯にして長短2種類の脚を付ける。長脚のもの（50）は、杯底部に2つの段と「一」のヘラ記号がある。脚部は、長脚1段3方透かしであろう。短脚のもの（51、52）は、たちあがりが無い杯身を上部にして下部を基部がやや太くハの字状に広がる脚を付ける。脚には透かし孔がない。杯底部は、回転ヘラ削りを行う。

壺は、短頸壺（53～55）と長頸壺（56、57）がある。53は、口径6.7cm、器高5.9cmを測る。口縁部が内湾後たちあがり端部が丸い。体部の最大径は、肩部あたりの上部にあり、底部は扁

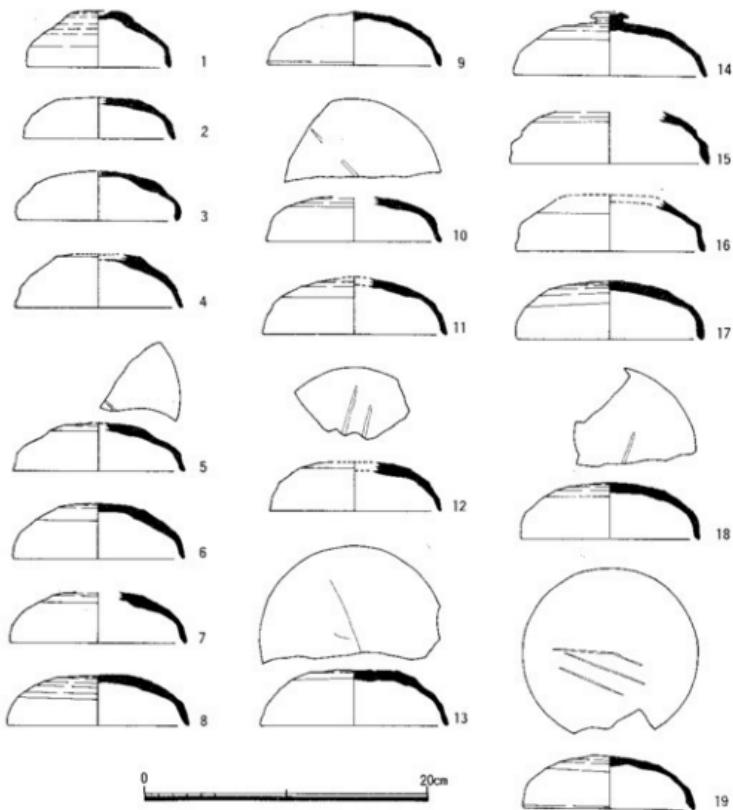


図-7 須恵器 その1

平な器形を成す。底部の調整は、半分位まで回転ヘラ削りである。54は、口径7.0cmを測り、53より頸部と口縁部の境が明瞭である。また、口縁端部も垂直にたちあがり体部的最大径は、中程に成るようである。55は、口縁端部が欠損している。体部の最大径は、ほぼ中程にあり、上半が円錐形であるが下半は半球形である。56、57は、長頸壺の口縁端部或は提瓶の口縁部である。56は、口径7.0cmを測り、器壁は他の器種より厚く約1cmである。口縁は、ほぼ垂直に内湾気味にたちあがり端部が丸くおさまる。57は、口径8.5cmである。口縁は、外反して端部が丸い。器壁は、56の約半分である。

瓶(58~62)は、体部を復元するものがなく実測したのは口縁部のみである。58は、口径12.4cm、小型の瓶である。口縁部は、垂直にたちあがり端部は外反し肥厚して終わる。

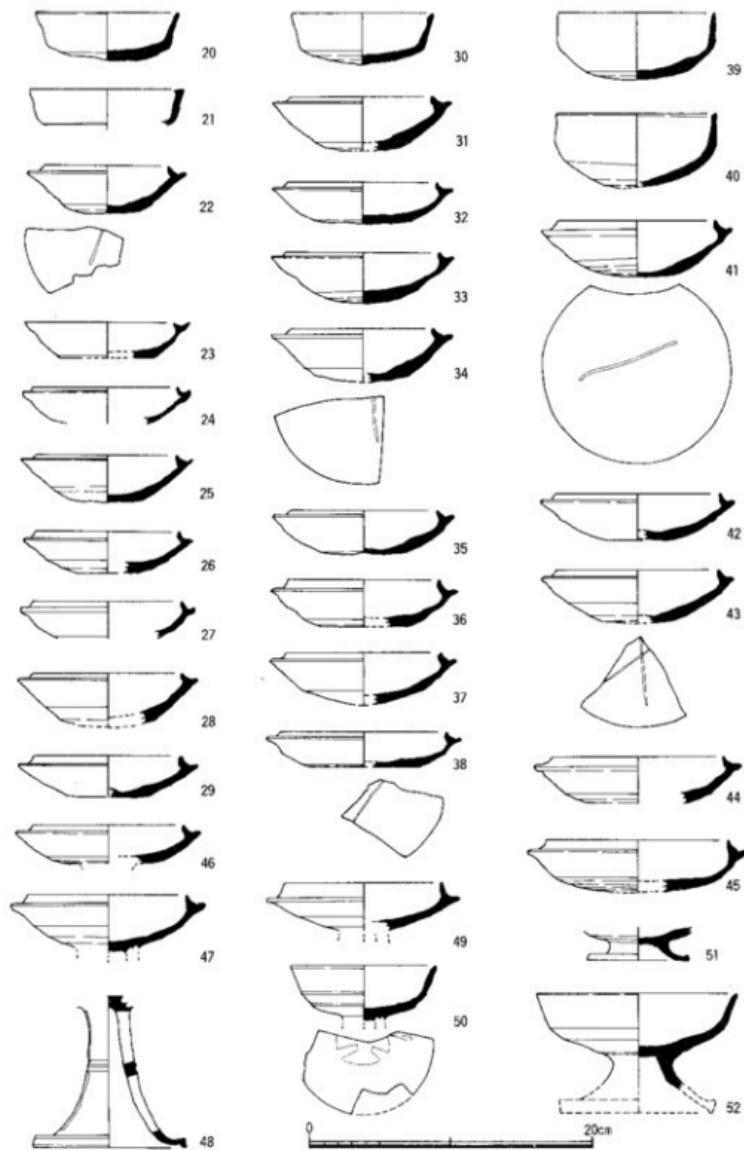


図-8 須恵器 その2

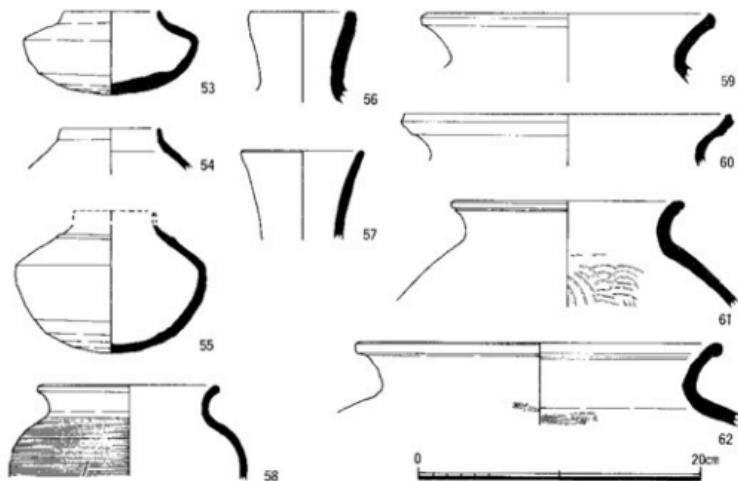


図-9 須恵器 その3

体部はカキ目調整を行い形状が球形になるようである。内面は、なで調整で平滑にしている。59は、口径19.9cmを測る。口縁部は、外反し、端部を上下に摘み出して尖らせる。60は、口径23.3cmとやや大きい。口縁部は、外反した後端部が上方にたちあがる。端部は、長方形に肥厚してさらに小さく上方に摘みあげる。61は、口径16.1cm。口縁部は、垂直に立ち上がり小さく外反する。端部は肥厚して外側に1条の凹線が巡る。体部外面は、並行叩き後なで消している。内面は、同心円の叩き文を施す。62は、口径25.6cmと最も大きい瓶である。口縁部は、大きく外反して端部は、丸く肥厚して終わる。体部外面は、並行叩き後カキ目調整である。内面は、同心円の叩き文を施す。

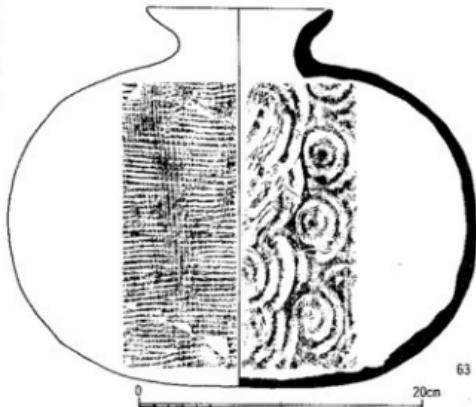


図-10 須恵器 その4

土器

土器は、杯、高杯、把手付鉢、長頸壺、瓶、羽釜等が出土した。

64～69の杯は、口径9.3～13.4cmを測り、後述する暗文が有る杯より若干扁平な感じのするものである。口縁端部は、小さく外方に折れ曲げ尖り気味に終える。内面に放射状の暗文と外面にヘラ磨き等の調整がないものである。色調は、茶桃色で、胎土は、石英、長石、くさり礫を含むが精良である。70は、口径10.4cm、器高3.9cmを測る杯である。口縁端部は、小さくの字状に折り曲げる。内面は、板なで調整後放射状の暗文を施している。胎土は、精良であり石英、長石、金雲母、くさり礫等の砂粒を少し含む。71は、口径11.3cm、器高4.0cmの杯である。口縁端部は、外面に強いなでを施し外反させるように調整している。内面に放射状の暗文があり、外面にヘラ磨きが認められる。

72は、口径12.0cm、器高3.6cmの杯である。口縁端部は、尖り気味に終わらせ、器壁を厚くしあげている。内面に螺旋と放射状の暗文を施し、外面下方をヘラなでしている。くさり礫を含んでいる。73は、口径13.4cm、器高4.2cmのやや中型の杯である。口縁端部を尖り気味に外面を凹線で外半させている。内面に放射状の暗文がある。底部に木葉痕がある。胎土は、密で金雲母とくさり礫を含んでいる。74は、口径12.9cm、器高4.1cmの杯である。口縁端部は、小さく外反させ丸く終わらせている。内面は、放射状の暗文を施し、外面上部を横方向のヘラ磨きで下部をヘラ削りしている。胎土は、精良である。75は、口径12.8cm、器高5.0cmの杯である。口縁端部を外方からの凹線で外反させ丸く仕上げている。内面に放射状の暗文を施している。外面は、指なで調整である。胎土は、長石、くさり礫、金雲母を含むが良好である。色調は、橙茶色である。76は、口径15.3cm、器高4.1cmの杯である。口縁端部は、内傾する面を持ち尖り気味に終わらせる。内面に放射状の暗文、外面上部にヘラ磨きを施している。77は、口径16.4cm、器高5.8cmのやや大型の杯である。口縁端部は、外面の凹線によって小さく外反させている。内面は、2段の放射状の暗文を施し、外面を密にヘラ磨きを施している。

78～80は、口径は、6.9、10.0、11.0cmの小型の高杯である。杯内面は、板なで調整で平滑にしている。脚部は、外側に踏ん張った形態で大型の高杯と同様である。胎土の中に金雲母とくさり礫を含んでいる。色調は、茶灰色である。81は、高杯の杯部である。口縁部はくの字に屈曲して端部を外反させている。82は、同一の形態の脚部と考えられる。底径10.9cmで外下方によく踏ん張る形態である。内面は、指調整である。外面は、板なでを施し7角形に仕上げている。83は、口径16.0cmの高杯の杯部である。体部と底部の境に段が付き口縁部は上方に少し屈曲する。口縁端部は、内側に凹線を付けている。内外面なで調整である。84は、82と同様の脚部であるが、断面は円形である。85は、口径8.8cmの把手付鉢である。把手は、口縁部の高さまでおおきく曲げ上げている。断面は、扁平である。口縁部は、端部で小さく外反させて内側にわずかな段を付けている。把手より上方はヘラ磨きを施し、下方はヘラ削りを行っている。

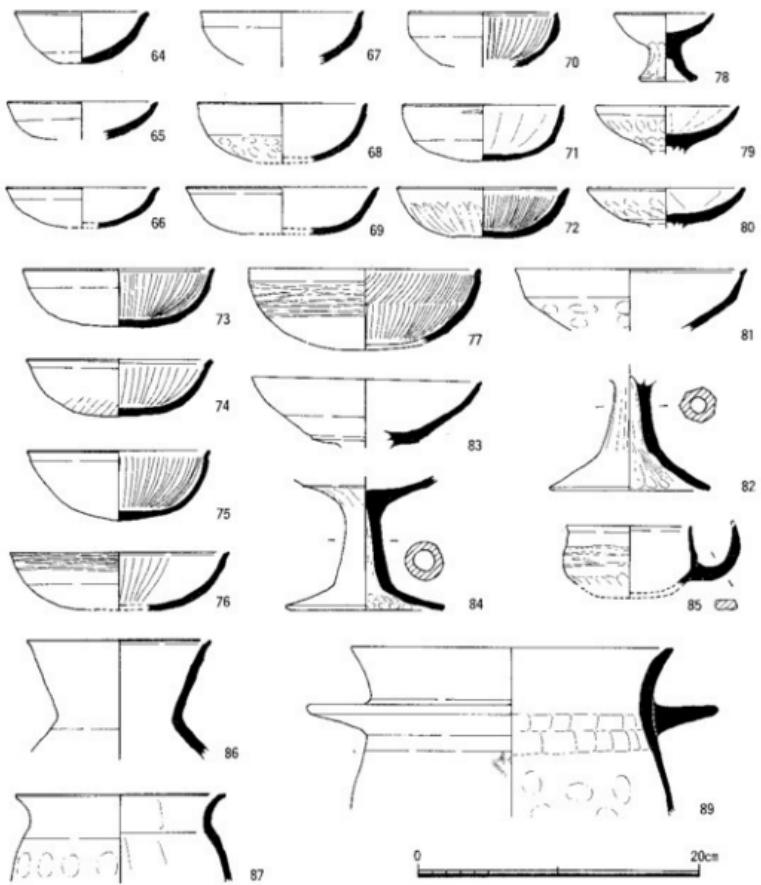


図-11 上器 その1

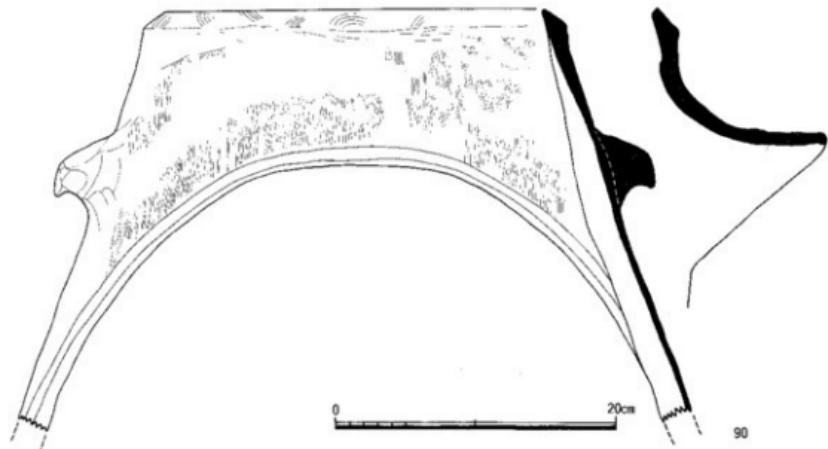


図-12 土師器 その2

86は、口径12.6cmの長頸壺である。体部は、あまり張らないもので、口縁部は、逆ハの字に拡がり端部内側に浅い凹線を付けている。内外面は、板なで調整である。87は、口径14.6cmの瓶である。口縁部は、体部から大きく外反し、端部は上方に浅い凹線を入れる。内面は、平滑に板なでによって仕上げている。2次焼成痕がついている。88は、口径35.4cmの大型の鉢である。口縁部は、体部から短く上方に伸び端部を水平方向に折り曲げる。体部中程下方はヘラ削りである。内面は、平滑に板なで調整で仕上げている。胎土は、石英、長石、くさり礫を含んでいるが精良である。89は、口径22.5cmの羽釜である。口縁部は、大きく外反し、端部は尖り氣味に終わる。鍔部は、水平方向に真直ぐ伸びる。接合部内面は、ヘラ削りしている。体部は、内面を指壓さえ、外面をハケ目調整して器壁を薄く仕上げている。胎土は、1mm前後の砂粒を多く含み赤褐色を呈する。90は、移動式の壺である。

埴輪

埴輪は、大溝2の下層土層から少量出土した。この遺物は、当調査区の南側にあった丘陵（今は削平されて平坦となっている）上から転落した遺物と考えられる。出土層位は、主に大溝2の下層埋土である灰褐色砂質土から出土している。

91は、円筒埴輪片である。径は不明であるが約30cm位のものである。たがは、あまり高くなく丁寧な造りである。調整は、外面を縦ハケ後横ハケを行い、内面はなで調整である。色調は、淡橙白色で、胎土は、石英、長石、くさり礫を含んでいる。焼成は、良好である。92も91と同様の円筒埴輪である。93は、円筒埴輪片である。たがは小さくやや高く造る。調整は、内外面をなで調整している。色調は、薄茶橙色である。胎土は、石英、長石、金雲母を含んでいる。焼成は、良好である。94は、円筒埴輪の破片である。たがは、断面三角形で簡素なものが付く。外面は、縦ハケ後簡単ななで消しをしている。色調は、茶橙色。胎土は、石英、長石、金雲母を含む粘土を使用している。焼成は、良好である。この他にも家形埴輪等の形象埴輪も出土している。

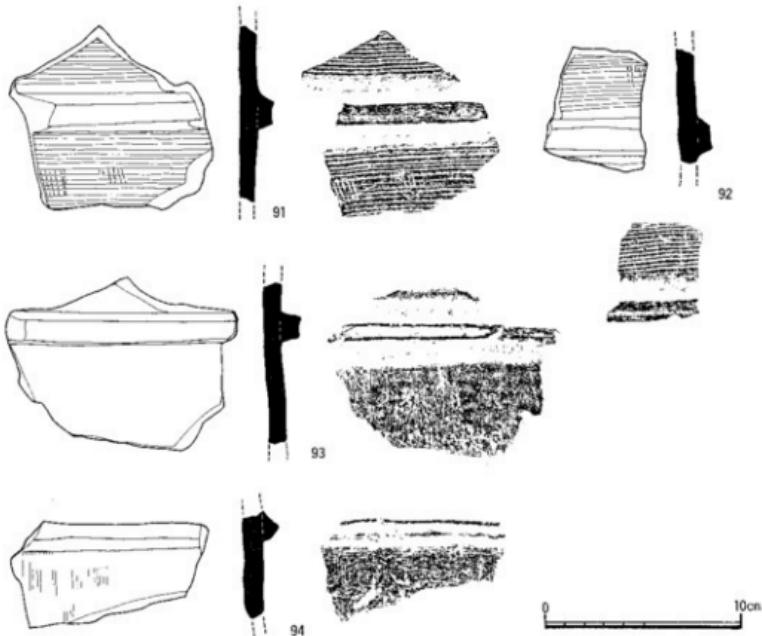


図-13 墓輪

瓦

井戸2より井筒として使用された瓦が4段1周9枚で計36枚が出土した。井戸の埋土から出土した遺物はないため瓦が唯一の遺物である。江戸時代後期から明治にかけて掘削した井戸であろう。6点について報告しておく。

瓦は、ほぼ正方形ですべて凸面に3列の歯型叩き痕を付けた後、内外端部を平滑になで調整や面取りしている。各列の叩き目痕は、長さ3~7cmがあり、列毎にはほぼ同方向で各列ハの字に組み合せる。99だけ3列同方向である。焼成は、良好である。胎土は、精良である。95は、幅25.3~25.5cm、長さ24.9cm、厚さ2.8~3.2cmを測る。叩き目は1列5単位である。96は、幅25.1~25.2cm、長さ24.7cm、厚さ2.7~3.0cmである。叩き目は1列6単位である。97は、幅25.0~25.3cm、長さ24.6cm、厚さ2.7cmである。叩き目は1列5単位である。98は、幅25.0~25.3cm、長さ24.5cm、厚さ3.0~3.4cmである。叩き目は、1列7単位である。99は、幅25.2~25.4cm、長さ24.8cm、厚さ2.7~3.2cmである。叩き目は、1列6単位である。100は、幅25.2~25.3cm、長さ24.5cm、厚さ2.7~3.0cmである。叩き目は、1列5単位である。

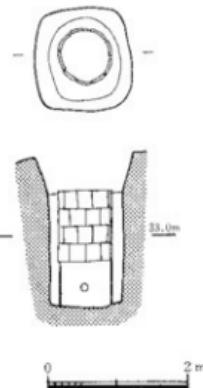


図-14 井戸2

轆羽口

金属の精鍛や加工に使用する火をおこす為の送風器である。出土総点数421個を数え、大溝1から23点(5.5%)、各ピット及び土坑の埋土から2点、大溝から396点(94.1%)である。その内実測可能のものが53点あった。形態は、円筒形を成す。先端は遺存するものが多いが、後端は例外なく欠損している為全長は不明である。現存長は、5.25~12.25cm、体部外径は、4.15~7.5cm、体部内径は、1.6~3.3cmを測る。表1の先端長は溶融金属の付着している部分で炉の内側に突出した長さを示し、3.1~5.3cmを測る。炉壁の厚さは、先端と後端との間の熱影響によって茶褐色及び灰褐色から青灰色に還元され変色した部分を示し、1.3~3.3cmで平均1.9cm前後を測る。傾斜角は、2~16度を測るが多くの場合は不明である。作り方は、丸棒(体部内径と同じ)に粘土を巻き、形成後棒を抜き取っている。外面は、縦方向の叩き後ナデ又は指押さえで調整している。外面中央部にハの字型と平行に並んでつけられている2通りのヘラ記号をもつものが数点ある。炉壁より後方にヘラ記号がつけられている事から、すべり止めの為、炉壁の位置の確認の為、送風の強弱をつける為に内径の大きさをかえそれをしめたもの、作った人の記号等、色々考えられるがはっきりとした事はわからない。胎土は、生駒西麓産の粘土と少し異なり、在地の粘土に長石、石英の砂粒を混ぜ合わせ使用している。色調は、赤褐色及び灰褐色を呈する。

(尾野)

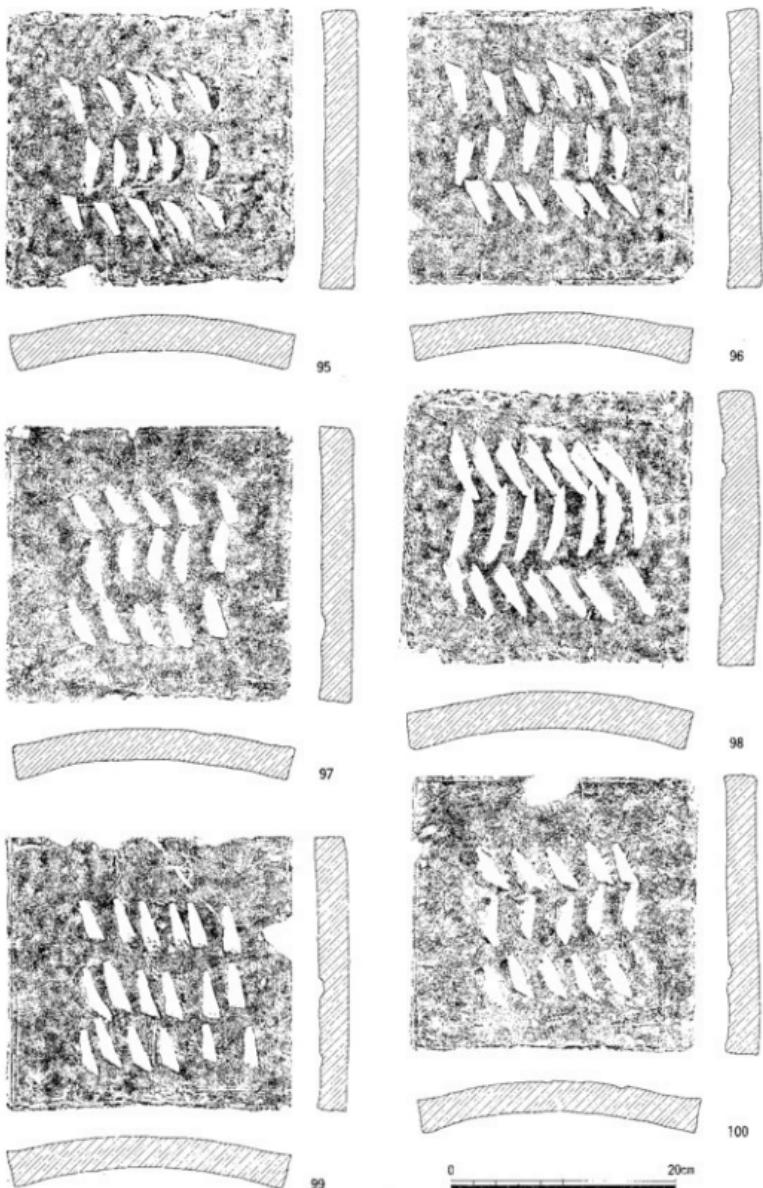


図-15 瓦（井戸2出土）

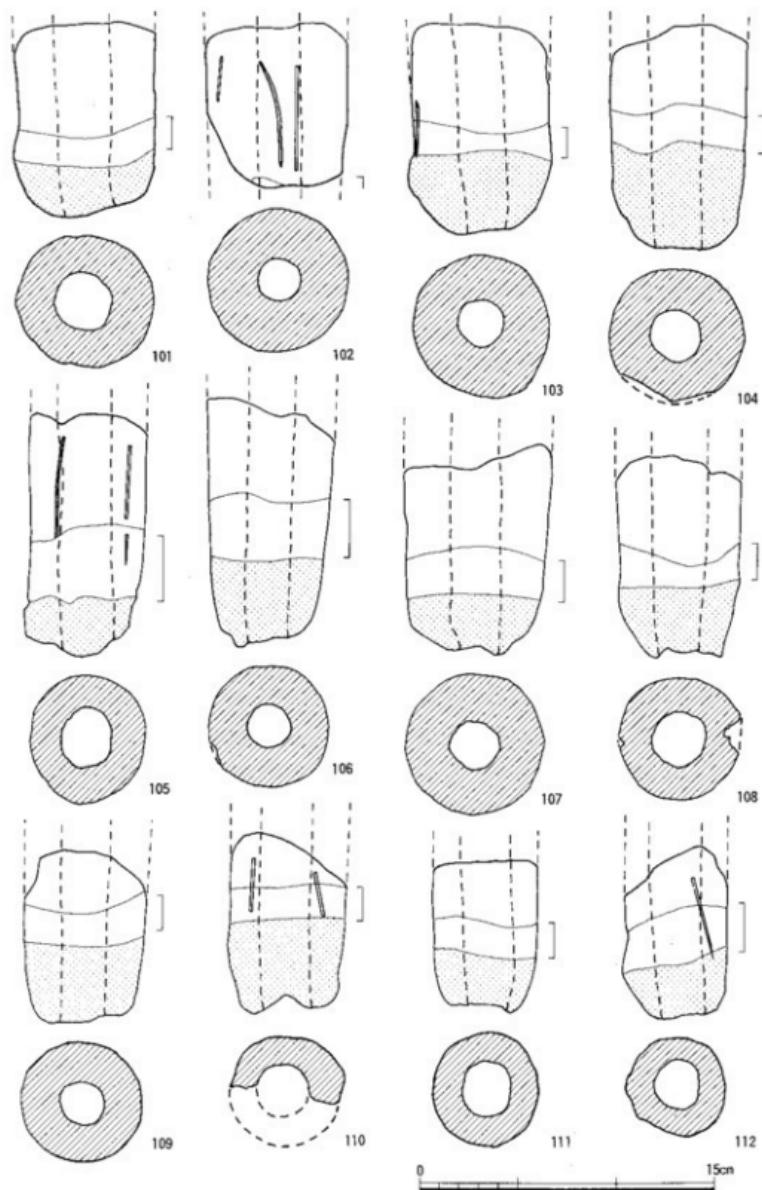


図-16 脊羽口 その1

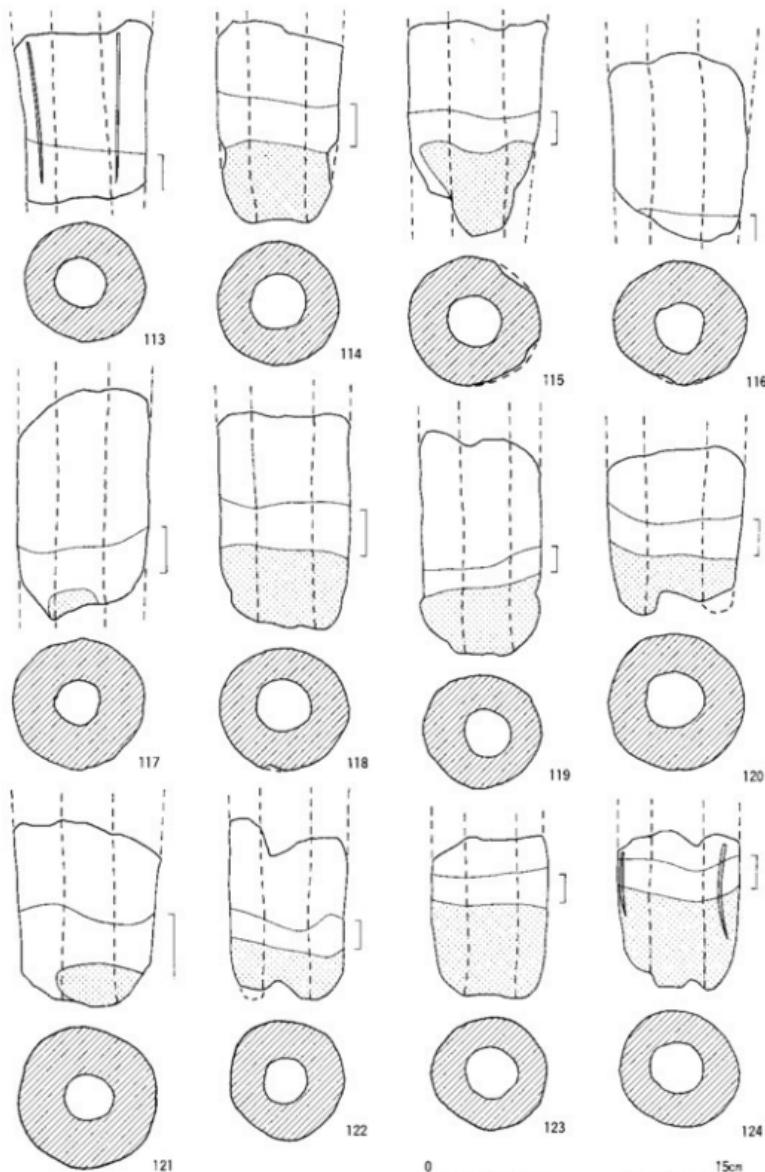


図-17 脊羽口 その2

表-1 糯羽口比較表

番号	遺構	現存長	体部外径	体部内径	先端長	軸壁の厚さ	傾斜	備考
101	大溝2	9.8	6.8~7.0	2.5~2.8	3.4	1.6	9	
102	"	8.3	7.0~7.2	2.1~2.2	欠損	—	—	ヘラ記号あり
103	"	10.55	5.95~6.1	1.8~2.45	4.2	1.55	—	ヘラ記号あり
104	"	11.25	5.6~6.85	2.3~2.75	5.45	1.9	2	
105	"	12.25	5.25~5.9	2.45~2.7	3.1	3.3	10	ヘラ記号あり
106	"	12.5	4.6~6.4	2.0~2.35	4.55	2.9	16	
107	"	10.6	7.3~7.5	1.9~2.55	3.1	2.1	12	
108	"	10.1	5.8~6.3	2.0~2.8	3.9	1.8	15	
109	"	8.55	5.35~6.2	2.2~2.5	4.4	1.7	7	
110	"	9.05	5.05~5.9	2.45~2.6	4.8	1.7	—	ヘラ記号あり
111	"	7.55	5.2~5.35	2.05~2.55	3.2	1.7	6	
112	"	8.6	5.0~5.25	2.25~2.55	3.6	2.4	8	ヘラ記号あり
113	"	9.15	6.0~6.95	2.45~2.7	欠損	—	—	ヘラ記号あり
114	"	10.1	5.6~6.25	2.4~2.95	4.15	2.1	—	
115	"	10.75	6.15~6.9	2.5~2.9	4.75	1.7	—	
116	"	9.55	6.35~6.7	2.45~2.65	欠損	—	—	
117	大溝1	11.55	6.35~6.6	2.3~2.7	1.55以上	—	—	
118	大溝2	10.85	6.3~6.6	2.8~3.1	4.25	2.35	4	
119	"	11.2	5.6~6.05	2.3~2.45	4.1	1.3	8	
120	大溝1	8.45	5.7~6.85	2.7~3.1	3.75	1.8	7	
121	大溝2	9.3	6.45~7.3	2.5~2.7	2.15以上	—	—	
122	"	9.1	5.6~5.95	2.2~2.55	3.2	1.45	7	
123	"	8.15	5.5~5.9	2.4~2.6	5.0	1.4	6	
124	"	8.0	5.3~6.1	2.6~2.7	5.3	1.7	15	ヘラ記号あり

鉄滓

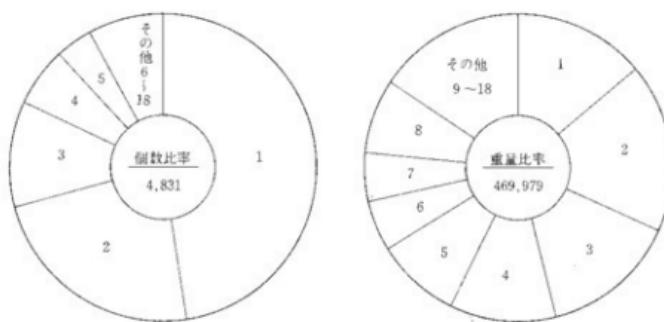
鉄滓の総重量は、482.578 g を測る。出土した遺構及び層位は、大溝2 の埋土の中層から下層にかけての土層からである。形状は、鍛治炉の構造によって異なることが考えられ、それぞれ自形を成すものが多くいわゆる椀形滓と云う形状のものがあまりない。鉄滓の表面に溶着した遺物に上器や獸骨が見られたが、鍛冶の操業時に混入したのか排棄した時に溶着したのか明確でない。

鉄滓の大きさ、重量、個数、磁力を測定した。鉄滓は、調査によって破碎したものも若干見られるが、大部分の資料は堅固で排棄当時のものと考えたい。磁力の測定には、千葉県文化財調査協会 穴澤義功氏にご教授をいたいた標準磁石を使用した。時期は、出土した須恵器から陶邑編年第II形式4段階から6段階までの6世紀末から7世紀中頃に比定される。

鉄滓の分析は、たたら研究会会員大澤正己氏のご好意により分析いただいた。鉄鉱石系の鍛冶滓との結果を得た。

成分	Total Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	MnO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	S	P ₂ O ₅	C	V	Cu
%	53.2	54	16.4	17.16	3.50	2.86	0.58	0.21	0.15	0.01	0.018	0.32	0.13	0.003	0.75

大溝2出土鉄滓分析値



	1個の重量	総重量	重量比率	個数	個数比率	1個の重量	総重量	重量比率	個数	個数比率	
1	0~50	65,976	14.0	2,314	47.9	10	451~500	13,307	2.9	28	0.6
2	51~100	84,249	17.9	1,135	23.5	11	501~600	12,642	2.7	23	0.5
3	101~150	68,581	14.6	543	11.2	12	601~700	7,150	1.5	11	0.2
4	151~200	52,912	11.3	303	6.3	13	701~800	7,257	1.6	10	0.2
5	201~250	42,053	8.9	183	3.8	14	801~900	6,035	1.3	7	0.14
6	251~300	24,841	5.3	90	1.9	15	901~1,000	2,805	0.6	3	0.06
7	301~350	25,268	5.2	77	1.6	16	1,001~2,000	9,845	2.1	8	0.17
8	351~400	18,522	3.9	49	1.0	17	2,001~3,000	5,010	1.1	2	0.04
9	401~450	18,616	4.0	44	0.9	18	3,001~	4,910	1.1	1	0.02

図-18 鉄滓の分析と分類（単位はcgs）

砥石

總点数8点が出土した。花崗岩4点、流紋岩1点、砂岩1点、粘板岩1点、安山岩1点である。花崗岩製のものは、石材の粒子が荒い。126は、断面6角形、129は、4角形を成し全面使用している。重量は、223, 800 gである。127は、5角形の内4面、130は、6角形の内3面に使用痕が認められる。重量は、660, 662 g。花崗岩製はすべて両端が欠損している。

125は、流紋岩で石材の硬度は軟質粒子が細かく仕上げ用に供されたものである。断面4角形で全面使用されている。128は、粒子が荒い砂岩製である。5角形で全面使用している。重量は、592 gである。131は、粘板岩製で片方の端部が欠損している。断面4角形を成し、3面を使用している。先端部に細かい割れがあり鉄槌代わりに使用されたと考えられる。325 g。

132は、安山岩製で半分が欠損している。断面6角形を成し、その内3面を使用する。その他3面に叩き痕らしい傷が残っている。1390 g。

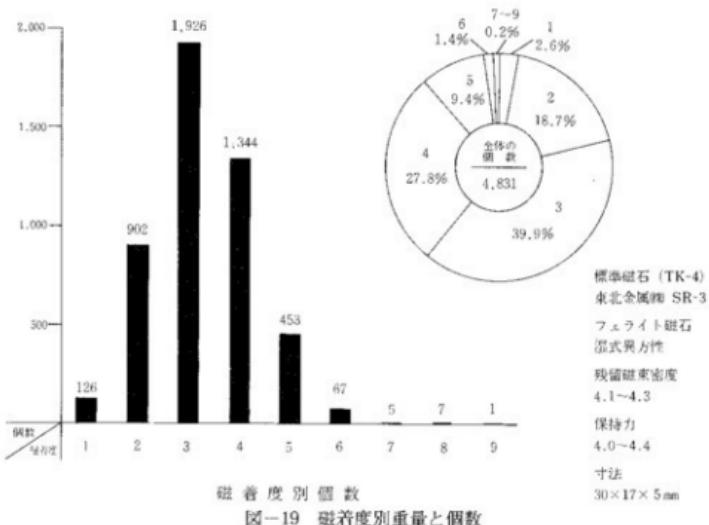
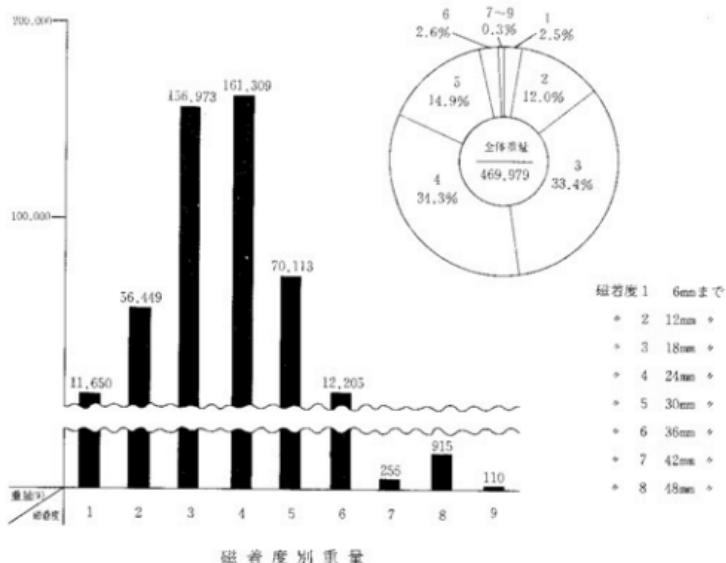


図-19 磁着度別重量と個数

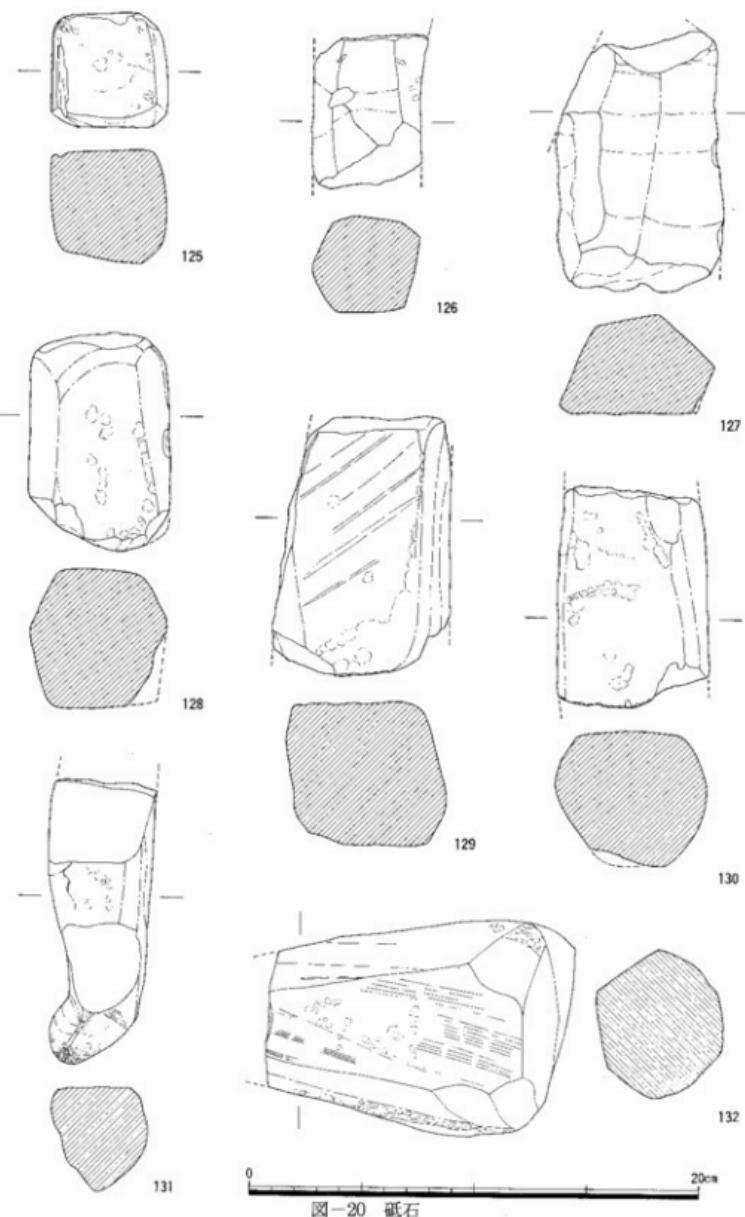


図-20 磯石

第4章　まとめ

今回の調査は、田辺遺跡の北側丘陵の中心部である。調査によって検出した遺構は、主に次の3時期に分類出来る。1期は、古墳時代後期、2期は、奈良時代、3期は、近世である。遺構と遺物は、第1、2章で述べたとおりであるが、調査の成果から若干の整理を試みたい。

I期（古墳時代後期）

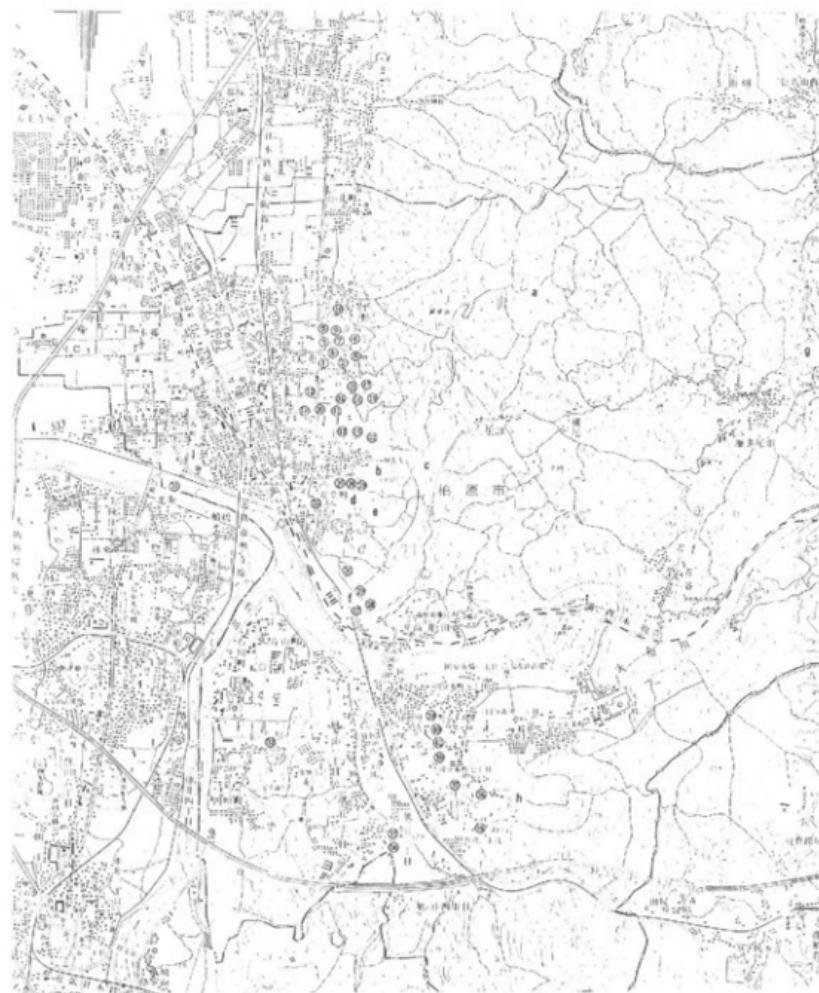
当期の遺構は、調査区の3/4を占める大溝がある。この大溝からは、土師器、須恵器、埴輪、フイゴ羽口、鉄滓、砥石等の出土遺物の大半が出土して今回の調査の最も重要な成果を得た。大溝は、原川の下流域から伸びた谷筋の丘陵の上方近くの位置にあたる部分で北北西方向から南南東方向に向く溝である。鍛冶を行った場所は、この調査区の南北方向にある丘陵の北側斜面であるが、遺物の出土状態から恐らく自然の開析谷の一部にあたる緩斜面地であったことがわかる。現在は、この丘陵の尾根筋はすべて後世に削平されて運動場となっている。自然地形は、古墳の築造によって第1期の地形変形が行われ、古墳時代の後期に第2期の鍛冶工房として整地されている。鍛冶工房は、今回の成果で次の事が分かった。溝埋土中の出土遺物の発見状況から、1. 原材料の置き場、2. フイゴ羽口を使用した炉で鉄材料の加熱する作業場、3. 金床台上で高熱に焼き上げた鉄を鍛錬する作業場、4. 鉄製品を研いで完成する作業場の4工程が整然と配置していたと考えられる。

II期（奈良時代）

この時期は、南側丘陵の中心部に田辺氏によって建立された寺院が建ち、その周辺に多くの集落跡が形成される。当調査区でも古墳時代後期に多くの鉄器の製作を行った鍛冶工房跡地がこの時代になると鍛冶関係の遺物がほとんど出土しなくなり集落跡に変化する。調査区内の大溝2がほとんど埋没して緩やかな斜面または平坦地となり、掘建柱建物が建ち並んでいる。建物が建つ位置は、溝の中程ではなく両側肩部の地盤が堅固な場所、また、湿気が少ない立地場所を選定しているようである。調査でこの時期の遺物包含層がほとんど確認されなかったのは、近世以降の農地改良や住宅地の整地のために削平されたのであろう。この時期の建物群は、田辺廃寺の周辺や当調査区周辺の平坦な丘陵上から非常に多く検出されているが、各建物がどのような配置で並んでいたのか明確でない。

III期（近世）

この時期の遺構は、井戸2基、ため池1、大溝1である。主に水田農耕に利用された遺構で



- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1～10 大県遺跡 | 27～30 高井田遺跡 | 35～41 田辺遺跡 |
| 11～22 大県南遺跡 | 31 船橋遺跡 | (40は今回の調査区) |
| 23～25 太平寺遺跡 | 32 玉手山遺跡 | a～h 古墳、古墓、散布地 |
| 26 安堂遺跡 | 33・34 原山遺跡 | |

図-21 錫冶関係遺物出土地



I 期



II 期



III 期



IV 期

図-22 時期別鍛冶関係遺物出土地

ある。調査区の東側は、少し以前まで農耕地として利用されていた地域である。当遺構もその一端示すものである。地盤の土層は、保水性のよい粘土層で水田農耕としてはよいが、丘陵上のため水資源の確保は、大小のため池を掘り利用することが必要である。よって、ため池から水を引くための水路を作る工事や地形の改造が必要で古くから多くの労力と資金が投人されたものと考えられる。井戸2の中に導水用の土管があり、水路か集水施設から水を引き貯水したものであろう。

調査区の北側に奈良街道が走り、今でも古い町並みが垣間見ることができる。この通りに面して、江戸時代末期、文政13年（1830年）私塾の立教館が開かれている。立教館は、医業を開くかたわら青少年を対象に読書講義などを始めた拓殖常味の開学した塾である。田辺氏が奈良時代に活躍した伝統を引く向学の一例である。

田辺遺跡は、これまでの調査例から鍛冶に係わる遺構と遺物が多く検出されており、鍛冶を行なう集団が移住していたことが確実である。鍛冶関係遺物が出土する時期は、6世紀後半または7世紀初頭に始まり、田辺庵寺の建立前まで継続している。この時期は、鍛冶を専業とする集団と考えて大過ないであろう。田辺古墳群は、丁度鍛冶生産が始まった頃から築造され、奈良時代まで継続している。鉄滓を出土する古墳が存在しており、鍛冶を行なった集団と係わりがある人物が葬られていた可能性が高い。田辺氏は、この田辺の地を本貫地としており渡来系の氏族といわれている。

今回の調査で製品が1点も出土しなかったのでどのような鉄製品を製作していたのか明かでない。鉄滓は、精錬または鍛冶において不要となった鉄屑である。これだけ多量の鉄滓がどの様な工程から廃棄されたのか明確でないがその物理的、科学的測定によって分類、分析を行った結果は、鉄滓や鍛冶についての基本資料として役立つものと成るだろう。現在、大阪府下において出土した鉄滓の量は1ヶ所の調査区としては、最高の482kgである。これだけの廃棄した鉄滓があることは、多量の鉄製品を製造しより多くの鉄材料が必要である。ここで問題となるのは、鉄素材、鉄器製作工人、鉄製作工程、鉄製品の種類等である。どの問題もここで結論的な成果は提供できないが、柏原市域の鍛冶関連遺物出土遺跡と時期的変遷図を掲げ今後の研究の一助としたい。

鍛冶関係遺物出土地は、市域の過年度調査等によって得た資料から集落遺跡内の調査区は数字を、古墳や古墓、散布地についてはアルファベットで図示した。

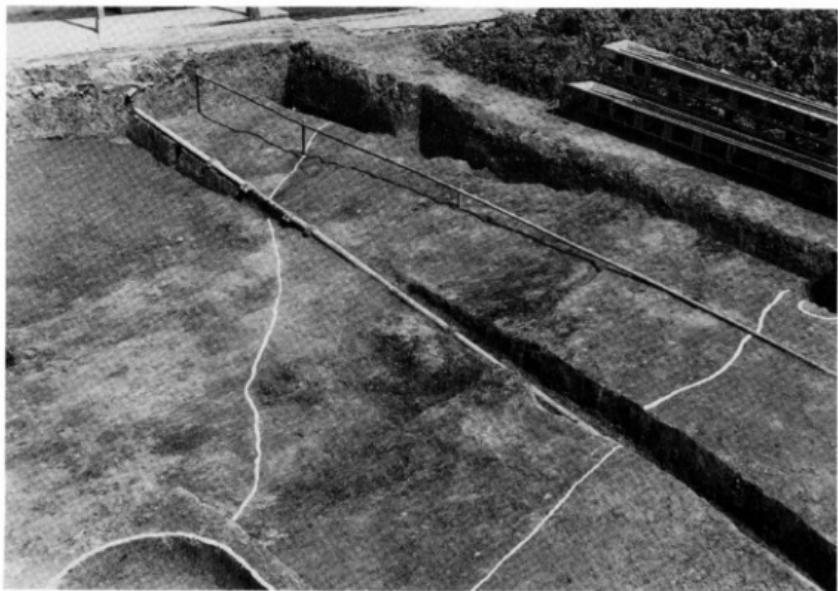
時期変遷は、IからIV期とした。それぞれの時期は、I期を古墳時代中期の5世紀代である。II期は、同後期の6世紀代から7世紀中頃、III期は、古代寺院が建立される7世紀中頃から奈良時代にかけてである。IV期は、中世以降の時期に分離した。

図 版

図版一 大溝一、二検出状況



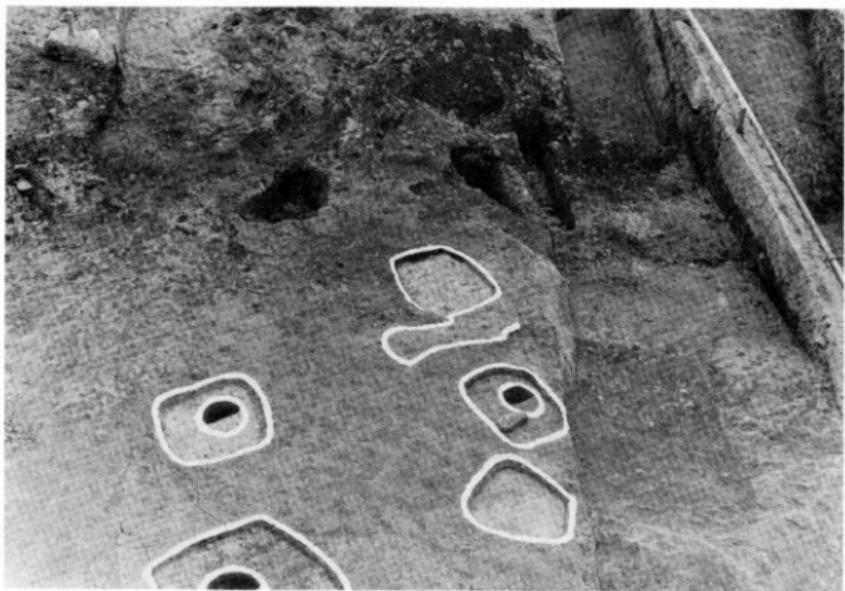
大溝1、2



大溝1、2



大溝 2



大溝 2



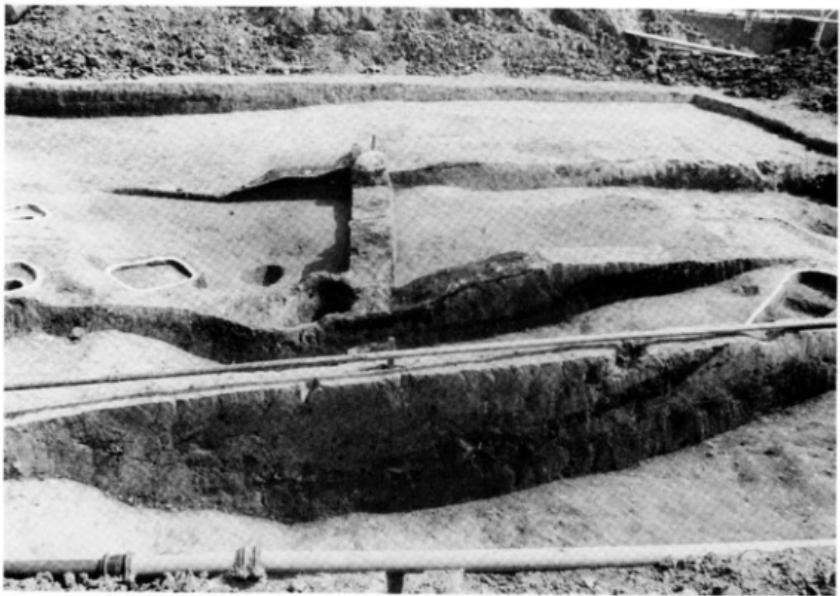
大溝 2



大溝 2



大溝 2



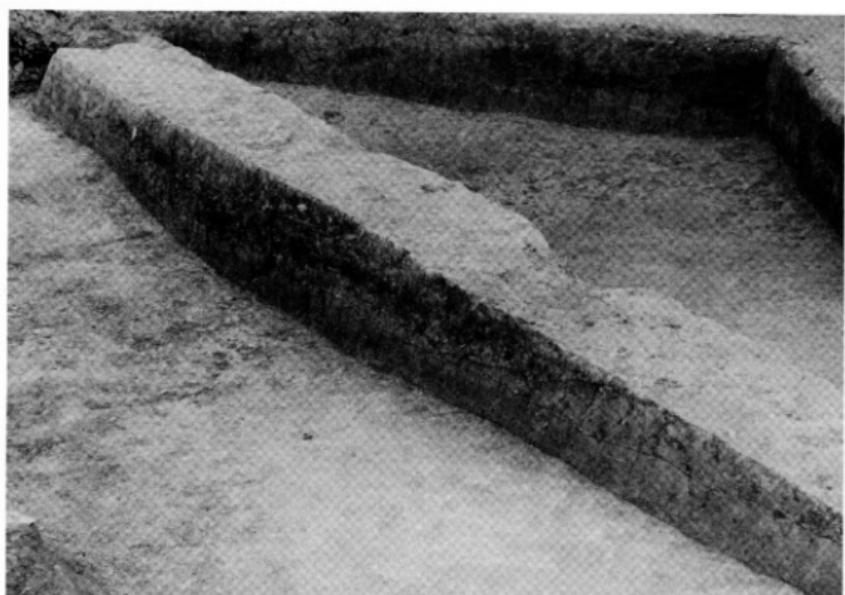
大溝 2



調査風景



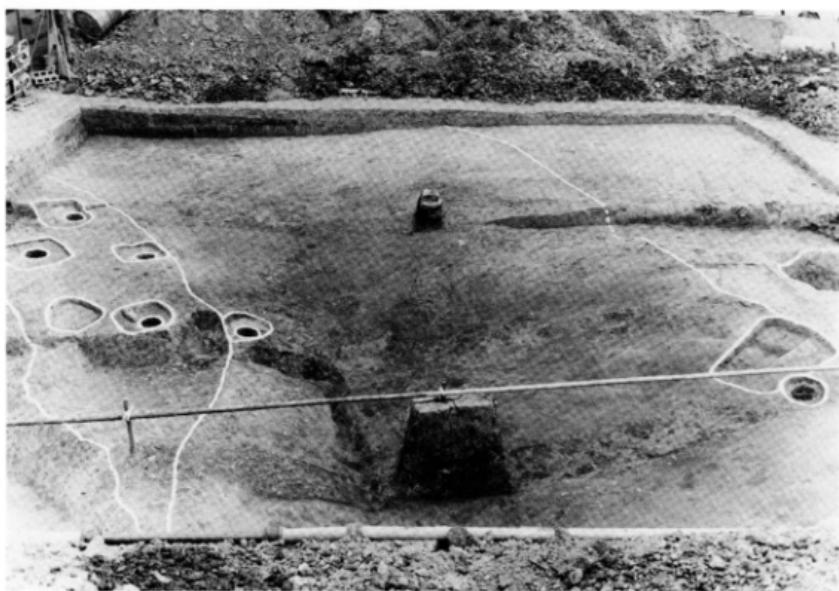
調査風景



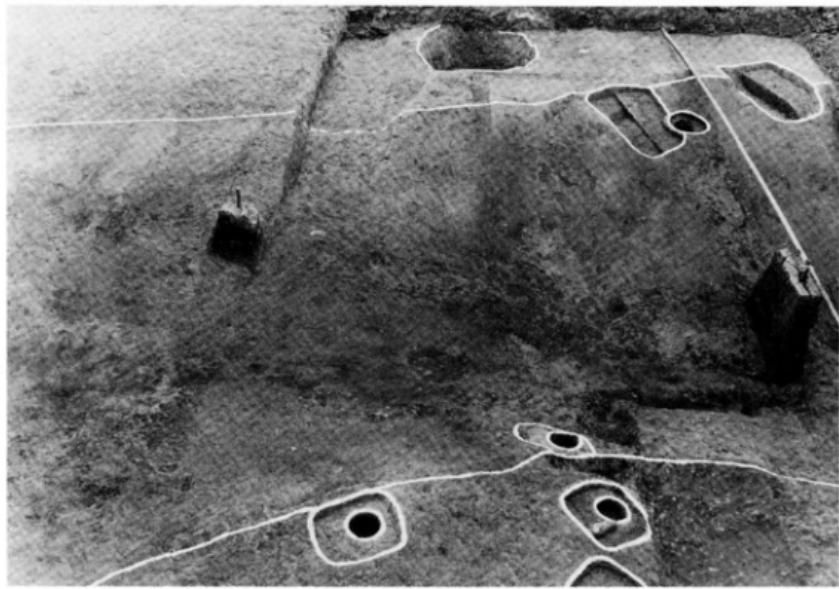
大溝2断面



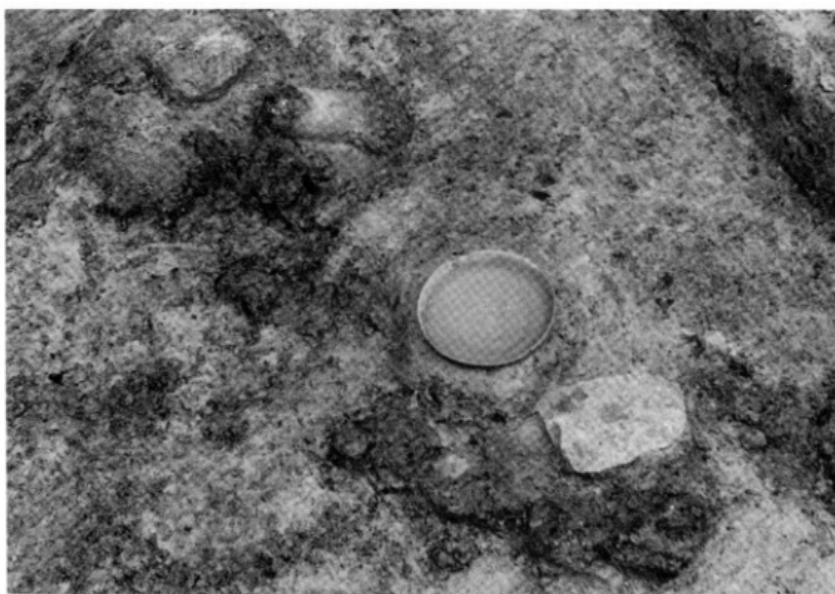
大溝2断面



大溝 2



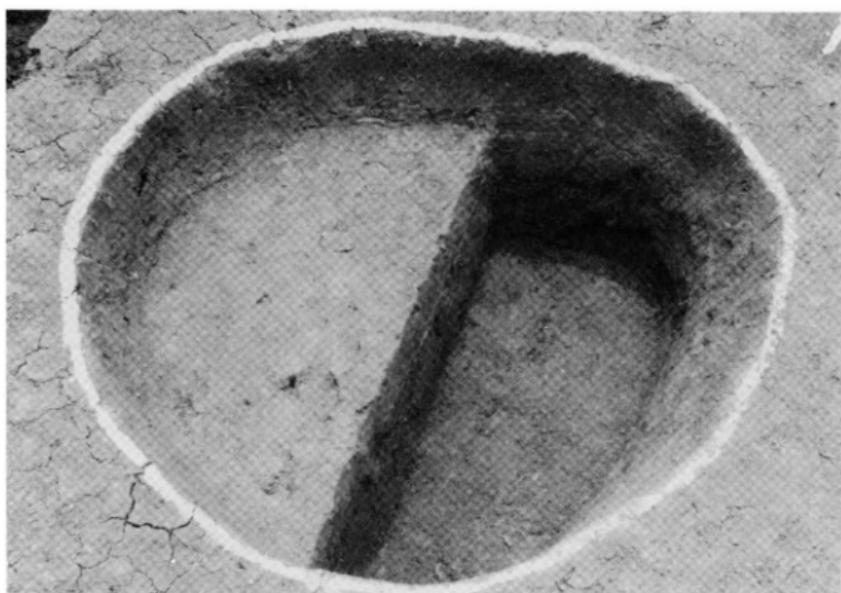
大溝 2



遺物出土狀況



遺物出土狀況



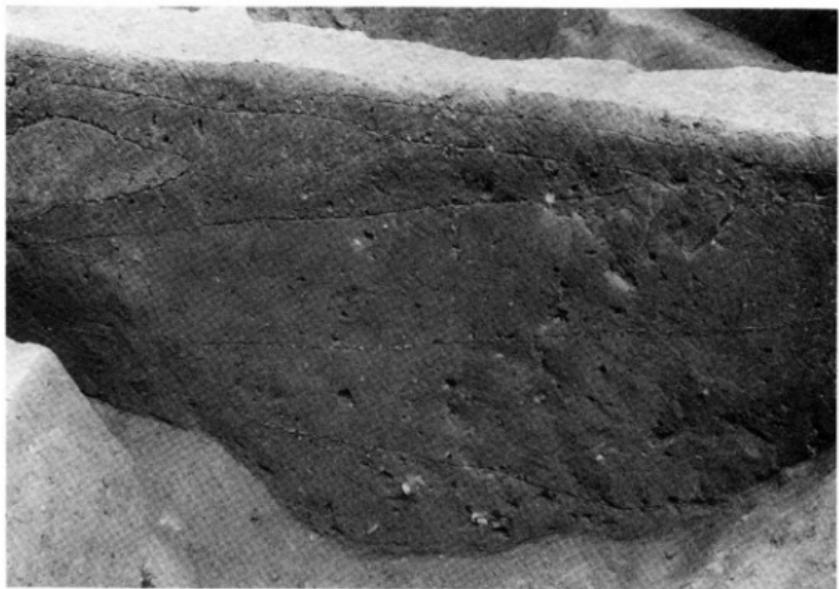
井戸 1



井戸 2



大溝1



大溝1断面

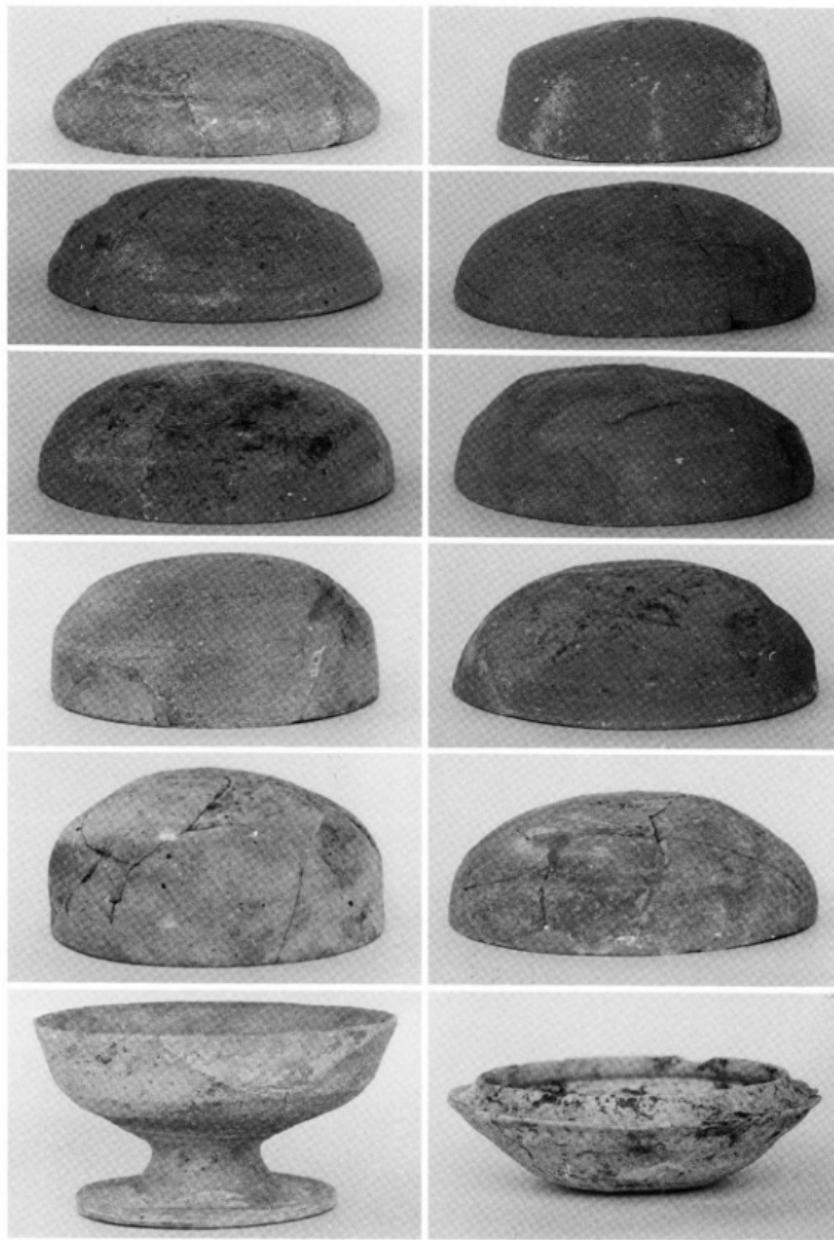


調査前風景



調査後風景

図版十二 出土遺物 その一







フィゴ羽口



鉄津

田辺遺跡

—国分小学校屋内運動場に伴う—

1989年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成2年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

the first time in the history of the world, the
whole of the human race has been gathered
together in one place, and that is the
present meeting of the General Assembly.
The world has been gathered together in
one place, and that is the present meeting of
the General Assembly. The world has been
gathered together in one place, and that is the
present meeting of the General Assembly.
The world has been gathered together in one place,
and that is the present meeting of the General Assembly.